

## 近隣騒音の心理社会的構造に関する研究

山内 宏太郎\*

久田 満\*\* 山本 和郎\*\*\*

## 要 約

本研究の目的は、近隣騒音の邪魔感を規定する心理社会的要因を見出すことにある。調査は、東京都目黒区内の学校騒音が問題となっている地区と問題となっていない地区の2地区に居住する主婦(N = 602)を対象にして、社会調査法によって実施された。

近隣から聞こえてくる音および自分の家から外に出ていると思う音のすべてについて、聞く側の音に対する反応と音源との心理社会的関係、および、出す側の音に対する姿勢などに関して分析が行なわれ、以下に示す結果が見い出された。

1) 学校騒音が問題となっている地区とそうでない地区の間には、地域の生活構造にちがいがあること。

2) 両地区の間には、近隣から聞こえてくる音、および、自分の家から外に出ていると思う音に対する反応および姿勢にちがいのあること。

3) 学校から出る音の邪魔感の度合は、聞く側の人間の学校に対する愛着の度合と関係のあること。

4) 近隣から聞こえる音の邪魔感の度合は、音源である家または人を知っている度合および好感度と関係のあること。

5) 邪魔感とは、音の種類またはその音に対する対処の仕方と関係のあること。

6) 騒音を聞く側と音源側との間には、音に対する反応および姿勢などにおいて、大きなずれがあること。

7) 騒音に悩んだことのある群とない群との間には、音に対する反応および姿勢においてちがいがあること、など。

## I 目 的

騒音 (noise) とは、「そもそも人間が主観的に感じている騒さい音」(moos, 1974)、「あることの好ましくない、なければよいと思う音」(守田, 1974) というように、個人または集団にとって、「望ましくない音 (unwanted sound)」(Farr, 1967) として定義することができる。すなわち、騒音であるか否かは、物理的大きさなどといった音そのものに備わる条件とは、必ずしも直接関係しない (Moos, 1974) と考えてよい。つまり、音の物理量それ自体よりも、音に対する反応を媒介する個人側の受けとり方や意味づけが、より重要な変数であるといえる。

音に対する人間の反応には、大きさ (loudness)、喧噪感 (noisiness) そして邪魔感 (annoyance) がある (難波, 1979) が、これらの3つの反応のうち、邪魔感が最も個人差が大きく、音の物理量が小さい場合、この傾向はさらに顕著なものと考えられる。

この邪魔感に関するこれまでの社会学的調査について Schultz (1978) が紹介している。航空機、道路および鉄道から出されるようなエネルギーが大きくそして地域全体に影響を与える公害騒音の場合でも、それぞれの騒音源に対する姿勢や騒音一般に対する態度といった個人的特性が、邪魔感の度合と関係があることを示している。音の物理量が小さくとも深刻な騒音被害を生み出している近隣騒音の場合には、このような個人的特性 (主

\* 上智短期大学

\*\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科

\*\*\* 慶應義塾大学文学部人間科学専攻

観的条件)が邪魔感を規定するさらに重要な要因になると考えられる。近隣騒音として問題になっている音は、住居周辺から聞こえてくる話し声、テレビ・ラジオの音、楽器の演奏音、足音、ドアの開閉音、等の日常の生活音を中心である。これらの生活音は、ある人にとってはがまんできないくらい邪魔な音であり、「小さな暴力」として自分たちの生活をおびやかす音(林, 佐野, 1975)となっている一方、ある人々にとっては、全く邪魔な音としては知覚されていない。このことは生活音を聞く側の主観的条件が重要であることを示唆している。

本研究の目的は、このような物理的量としては小さく、与える邪魔感に大きなちがいを生じさせる生活騒音を対象にして、邪魔感を規定する主観的条件が何であるかを明確にすることにある。とくに、音を聞く側のもつ音源に対する心理社会的関係が邪魔感とどのような関係にあるかを見出すことが、この研究の中心的課題である。

## II 研究方法と手続き

### 調査地区

本調査は、東京都目黒区内の公立小学校をそれぞれの中心とする2つの地区で実施された。小学校から発生する騒音に対して住民から苦情の出ている地区(A地区)とそうでない地区(B地区)の2地区である。これらの調査地区の選択は、目黒区教育委員会の学校騒音に関する情報によって決定された。また、両地区が幹線道路および鉄道から比較的離れたところに位置しており、交通騒音といった物理量として大きな騒音の影響が少ないことも選択に際し考慮された。

### 調査対象

上述の2地区内で、できるだけ隣接し合った住居に住む主婦またはそれに代わる女性を対象とした。主婦を調査対象とした理由は、住戸内および住戸周辺での生活時間が比較的長く、近隣騒音の問題に接する可能性が最も大きいこと、また、面接調査に協力してもらいやすいことであった。

調査対象者数、回収数および有効データ数は、表1に示すとおりである。

### 調査方法

本調査は、調査実施前にあらかじめ葉書きによる調査協力依頼をしたうえで、調査員28名(慶應義塾大学生)が各戸訪問し、以下に示す各調査項目に関して口頭で回答を求め記録するという方法がとられた。なお、調査は、近隣騒音が比較的問題となりやすい夏期を選び、1981年9月15日から9月30日にかけて実施された。

表一 1 調査地区別サンプル

調査地区	調査対象数	回収数	有効データ数
A地区	301	200 (66.5%)	193 (64.1%)
B地区	301	226 (75.1%)	225 (74.8%)
計	602	426 (70.8%)	418 (69.4%)

### 調査項目

#### 1. フェースシート

1) 家族構成(性別、年齢、職業形態、職種、勤務形態、休暇形態および最終学歴)

2) 騒音に悩まされた経験の有無

3) 住居(所有形態、住居構造、住居形式、住居の広さおよび居住年数)

#### 2. 住居周辺から聞こえる音

1) 30種類の音のリスト(表17参照)の中から、住居周辺から聞こえてくるすべての音をあげる。ただし、音源の異なる場合は、独立した音として取り扱う。

2) 1)であげられた各音について、その音源となっている家を地図上に記された家番号で答える。

3) 1)であげられた各音の「邪魔感の程度」を、「非常に邪魔」「やや邪魔」「どちらともいえない」および「親しみを感ずる方」の5段階で評定をする。

4) 2)で音源としてあげられた家または人に対する「好感度」を、「好感をもっている方」「やや好感をもっている方」「どちらともいえない」「あまり好感をもっていない方」「全く好感をもっていない」の5段階評定をする。

5) 2)で音源としてあげられた家または人の「知っている程度」を、「姿・顔を見たことがない」「ちらっと見かける程度」「挨拶をする」「立話をする」「それ以上のつきあいがある」の6段階で評定する。

#### 3. 自分の家から外に出ている音

1) 26種類の音のリスト(表19参照)の中から、自宅から外に出ていると思うすべての音をあげる。

2) 1)であげられたすべての音について、「気になる程度」を、「かなり気になる」「少し気になる」「全く気にならない」の3段階で評定する。

3) 1)であげられたすべての音に対する「具体的配慮」の有無。

#### 4. 近隣騒音一般に対する反応

5. 地域生活(地域生活の意見、地域の環境問題の解決法、地域への参加度・関心度、近所づきあいの好嫌など)

6. 住戸周辺印象評価(景観、緑の量、込みあい感)

7. 神経質さ

8. 健康（本人および家族の健康感、心身の自覚症状など）

9. 小学校との関係（通学者・関係者の有無、学校への愛着感、学校に対する評判の受けとり方）

10. 近隣騒音に対する意見項目

11. P・Fスタディ方式による反応。（この項目は、本研究の分析から除かれている。）

なお上記の調査項目の一部は、難波（1978）および、難波、桑野、中村、加藤（1978）の研究を参考にし、また山本（1977）、加藤（1976）、および、小林・石原・坂本（1977）、で用いられた項目の中から本研究目的にあった項目を選び使用した。

### III 結果と考察

#### 1. 地区の特性

学校騒音が問題となっているA地区（N = 193）と問題となっていないB地区（N = 225）の主婦（回答者）と世帯主の特性は、表2に示すとおりである。

A地区の主婦の平均年齢（表2-1）は、44.7才、最終学歴（表2-7）は、「大学・短大卒」が31.6%で、B地区の主婦の平均年齢47.6才、最終学歴の「大学・短大卒」16.9%と比較して、年齢ではやや低く、学歴では高い傾向にある。また、職業形態（表2-6）では、A地区の主婦の65.8%が「無職」であり、B地区の34.7%と比較して専業主婦の占める割合がかなり高いことがわかる。

世帯主の平均年齢（表2-1）と最終学歴（表2-5）では、A地区の世帯主の平均年齢は、49.7才、最終学歴は「大学・短大卒」55.4%で、B地区の世帯主の平均年齢52.4才、最終学歴の「大学・短大卒」46.2%と比較して、主婦の場合と同様に、A地区は、平均年齢ではやや低く、学歴では高い傾向にあることがわかる。

世帯主の職種（表2-3）の比較では、A地区は「管理的職業」の占める割合が26.9%で、B地区の14.7%と比較してかなり高いのが目立つ。B地区はA地区と比較して、「事務的職業」および「技能職」の占める割合がやや高い傾向にある。

休暇形態（表2-4）の比較では、「毎週平日休暇あり」の占める割合は、A地区は16.6%で、B地区の6.2%と比較して高く、また、「日曜休暇のみ」は、A地区47.7%、B地区56.0%とB地区の方が高い。

尚、世帯主の「職業形態」（表2-2）および「勤務形態」（表2-3）では、両地区の間に有意の差は見い出されていない。

表-2 両地区の世帯主と主婦（回答者）の特性  
1. 平均年齢

	A 地区 (N = 193) (SD)	B 地区 (N = 225) (SD)
世 帯 主	49.7 (10.01)	52.4 (13.50)
主婦（回答者）	44.7 (13.76)	47.6 (11.54)

#### 2. 世帯主の職業形態（単位%）

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
自 営 業 主	25.9	22.2
常 用 勤 務 者	58.5	56.4
無 職	8.8	15.1
そ の 他	7.8	6.3

$$\chi^2 = 4.39 \quad df = 3$$

#### 3. 世帯主の職種（単位%）

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
専門的技術的職業	18.7	16.9
事務的職業	12.4	17.8
管理的職業	26.9	14.7
販売サービス業	13.5	12.9
運輸・通信業	0.0	4.0
技能職	10.9	13.3
D. K (無職を含む)	17.6	20.4

$$\chi^2 = 9.69 \quad df = 5 \quad P < .10$$

#### 3. 世帯主の勤務形態（単位%）

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
日 勤 の み	78.8	71.6
夜 勤 の み	0.0	0.0
日勤・夜勤両方	5.0	7.1
D . K	16.2	21.3

$$\chi^2 = 0.98 \quad df = 1$$

## 4. 世帯主の休暇形態 (単位%)

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
毎週平日休暇あり	16.6	6.2
時々平日休暇あり	18.1	15.1
日曜休暇のみ	47.7	56.0
D . K	17.6	22.7

$$\chi^2 = 11.70 \quad df = 2 \quad P < .01$$

## 5. 世帯主の学歴 (単位%)

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
小・中学校	9.8	14.7
高等学校	28.5	34.2
大学・短大	55.4	46.2
D . K	6.3	4.9

$$\chi^2 = 4.75 \quad df = 2 \quad P < .10$$

## 6. 主婦の職業形態 (単位%)

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
自 営 業	4.7	4.0
自営業の家族	3.0	5.8
常用勤務者	10.9	10.7
パートタイム勤務者	8.3	8.0
内職従事者	0.0	0.0
無 職	65.8	34.7
D . K	7.3	36.8

$$\chi^2 = 10.48 \quad df = 4 \quad P < .05$$

## 7. 主婦の学歴 (単位%)

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
小・中学校	10.4	14.2
高等学校	52.3	61.3
大学・短大	31.6	16.9
D . K	5.7	7.6

$$\chi^2 = 12.16 \quad df = 2 \quad P < .05$$

表-3 両地区の家族型 (単位%)

	夫 婦 の み	長 子					単・独身	母子家族	複 合 家 族
		3才未満	3才~5才	6才~10才	11才~17才	18才以上			
A 地区 (N = 193)	18.7	2.6	3.0	10.9	10.9	29.0	2.1	3.0	19.7
B 地区 (N = 225)	12.9	3.0	1.8	7.6	10.7	32.9	4.0	0.9	25.3

$$\chi^2 = 10.21 \quad df = 8$$

家族型 (表3) では、両地区の間に有意の差は見い出されていないが、A地区はB地区と比較して「夫婦のみ」の家族 (18.7%) が多く、B地区は「複合家族」 (25.3%) が多い傾向にある。

表4は、家屋の特徴を示したものである。両地区の間には、住居構造 (表4-2)、住居形式 (表4-3) および居住年数 (表4-4) において有意の差がみられる。すなわち、A地区はB地区と比較して、鉄筋構造 (35.6%)、集合住宅 (33.7%) といった住居構造・形式が多く、また、B地区はA地区と比較して、木造 (87.1%)、一戸建て独立住宅 (78.2%) が多い傾向にあり、そして、居住年数ではB地区の方が長く、20年以上この地区に居住するものが過半数にのぼっている。

表-4 両地区の家屋の特性 (単位%)

## 1. 住居の所有

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
所 有		
持 家	75.1	80.9
借 家	23.8	19.1
D . K	1.1	0.0

$$\chi^2 = 1.52 \quad df = 1$$

2. 住居構造

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
木 造	63.7	87.1
鉄筋・鉄骨	35.6	11.9
D . K	0.7	1.0

$\chi^2 = 31.42 \quad df = 1 \quad P < .001$

3. 住居形式

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
独立住宅	64.8	78.2
集合住宅	33.7	18.7
D.K(その他を含む)	1.5	3.1

$\chi^2 = 9.33 \quad df = 1 \quad P < .01$

表5は、近所づきあいの特徴を示している。近所づきあいの好嫌(表5-1)、および、来客などがあって騒がしくなる場合や騒がしくしたときの挨拶の有無(表5-2)において、両地区の間に有無の差がみられる。すなわち、A地区はB地区と比較して、近所づきあいを「好まず」(37.3%)、また、「騒がしくしないようにする」(55.4%)傾向にある。B地区は、近所づきあいを「好み」(74.3%)、騒がしくすることも多く、その場合でも「挨拶しない」(40.0%)ものが多い傾向にある。おみやげ・おすそ分けの習慣(表5-3)では、両地区の間には有意の差はみられないが、両地区とも80%以上が「する」と答えている。

表6は、地域参加の特徴を示している。両地区の間には、自治会費(表6-3)、神社への寄付(表6-4)、および区議会議員の名前(表6-7)において有意の差がみられる。すなわち、A地区はB地区と比較して、自治会費を払う割合(67.4%対94.7%)、神社への寄付をする割合(37.8%対83.6%)、および、区議の名前を知っている割合(48.7%対68.4%)のすべてにおいて低く、地域への参加・関心が一般的に低い傾向にある。しかし、環境問題の解決法(表6-2)では、困った問題が生じたときは「運動・組織づくりに参加する」(16.6%対5.3%)と答えたものが多い。

なお、地域生活の意見(表6-1)、区の広報(表6-5)、区長の名前(表6-6)および区議会選挙(表6-8)においては、両地区の間に有意の差は見い出されていない。

4. 居住年数

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
1 年 以 内	7.3	1.3
3 年 以 内	8.8	8.0
5 年 以 内	11.9	5.3
10 年 以 内	19.7	18.2
20 年 以 内	22.8	17.3
20 年 以 上	28.5	48.0
D . K	1.0	1.9

$\chi^2 = 26.20 \quad df = 5 \quad P < .001$

表-5 両地区の近所づきあいの特徴(単位%)

1. 近所づきあいの好嫌

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
好 き	15.5	19.6
ま あ 好 き	45.6	54.7
あまり好きでない	32.6	23.1
嫌 い	4.7	0.8
D . K	1.6	1.8

$\chi^2 = 11.69 \quad df = 3 \quad P < .05$

2. 騒さくするときの挨拶の有無

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
す る	17.6	22.2
し な い	26.4	40.0
騒 が な い	55.4	34.2
D . K	0.6	4.6

$\chi^2 = 17.26 \quad df = 2 \quad P < .001$

3. おみやげ・おすそ分けの習慣の有無

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
す る	82.4	84.9
し な い	17.1	12.9
D . K	0.5	2.2

$\chi^2 = 1.29 \quad df = 1$

表一 6 両地区の地域参加の特徴 (単位%)

## 1. 地域生活の意見

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
この土地のしきたりに従う	30.1	29.8
要求は区政に反映させる	4.0	5.8
住民の互いの協力	60.1	56.9
あまり関心はない	5.8	5.3
D . K	0.0	2.2

$$\chi^2 = 0.71 \quad df = 3$$

## 2. 環境問題の解決法

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)	P
1 運動・組織づくり	16.6	5.3	<.001
2 マスコミ・投書	0.0	0.0	
3 役所にたのむ	13.5	16.4	
4 議員にたのむ	11.4	6.2	
5 団体にたのむ	3.0	0.0	
6 自治会にたのむ	11.4	7.6	
7 その他の行動	7.8	8.0	
8 自分で処理	12.9	11.1	
9 何もしない	9.8	12.0	
10 困ったことなし	43.0	44.9	

## 3. 自治会費

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
払 う	67.4	94.7
払 わ ない	23.8	3.0
自 治 会 なし	6.2	1.2
D . K	2.6	1.1

$$\chi^2 = 44.4 \quad df = 2 \quad P < .001$$

## 4. 神社への寄付

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
す る	37.8	83.6
し な い	51.3	15.1
祭 (神社) なし	8.8	0.0
D . K	2.1	1.3

$$\chi^2 = 76.84 \quad df = 1 \quad P < .001$$

## 5. 区の広報

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
必 ず 読 む	64.8	66.2
時 々 読 む	32.1	30.2
読 ま ない	3.1	3.0
D . K	0.0	0.6

$$\chi^2 = 0.12 \quad df = 2$$

## 6. 区長の名前

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
知 っ て い る	66.8	68.4
知 ら ない	33.2	29.8
D . K	0.0	1.8

$$\chi^2 = 0.39 \quad df = 1$$

## 7. 区議会議員の名前

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
知 っ て い る	48.7	68.4
知 ら ない	49.2	28.9
D . K	2.1	2.7

$$\chi^2 = 18.03 \quad df = 1 \quad P < .001$$

## 8. 区議会選挙

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
投 票 し た	78.2	80.9
投 票 し な か った	19.7	16.9
D . K	2.1	2.2

$$\chi^2 = 0.54 \quad df = 1$$

表7の周辺環境の印象評価では、外の景色(表7-1)、緑の量(表7-2)および 込み合い感(表7-3)のすべてにおいて、両地区の間には有意の差がみられる。

まず、外の景色(表7-1)では、「よい方」(「まあよい」、「かなりよい」および「非常によい」の合計)と回答したものは、A地区では、54.9%であるのに対し、B地区では、37.7%というように、A地区はB地区と比較して周辺の外の景色をよいと見ている傾向にある。

緑の量(表7-2)では、「多い方」(「やや多い」および「かなり多い」の合計)と回答したものはA地区では、66.3%であるのに対して、B地区では45.3%というように、A地区はB地区と比較して周辺環境に緑が多いと見ている傾向がある。

また、込み合い感(表7-3)では、「込み合っている方」(「やや込み合っている」および「かなり込み合っている」の合計)と回答したものは、A地区では、63.2%であるのに対して、B地区では、80.0%というように、A地区はB地区と比較して、周辺環境の込み合い感は低いと見ている傾向がある。

すなわち、これらの周辺環境評価に関する結果から、A地区はB地区と比較して、外の景色は良く、緑の量も多く、そして、込み合い感は少ないというように、一般的にみて、周辺環境は快適であると感じているものが多い傾向がある。

表一7 両地区の周辺環境の印象評価(単位%)

1. 外の景色

	A地区 (N=193)	B地区 (N=223)
非常によい	6.2	3.0
かなりよい	11.9	0.0
まあよい	36.8	34.7
あまりよくない	38.4	51.6
わるい	6.7	7.6
D . K	0.0	3.1

$\chi^2 = 33.06 \quad df = 4 \quad P < .001$

2. 緑の量

	A地区 (N=193)	B地区 (N=225)
かなり多い	16.6	8.4
やや多い	49.7	36.9
どちらともいえない	9.8	10.7
やや乏しい	17.1	28.0
かなり乏しい	6.7	15.1
D . K	0.0	0.9

$\chi^2 = 21.54 \quad df = 4 \quad P < .001$

3. 込み合い感

	A地区 (N=193)	B地区 (N=225)
かなり込み合っている	25.9	43.6
やや込み合っている	37.3	36.4
どちらともいえない	9.8	8.9
あまり込み合っていない	25.4	9.3
まったく込み合っていない	0.0	0.0
D . K	1.6	1.8

$\chi^2 = 25.24 \quad df = 4 \quad P < .001$

前にも述べたように、A地区とB地区は学校騒音が問題となっている地区となっていない地区である。そこで、両地区におけるそれぞれの学校との関係を示したのが、表8である。

学校に通う子どもまたは関係者の有無(表8-1)と学校に対する愛着度(表8-2)について、両地区の間に有意の差がみられる。すなわち、A地区の学校に通う子どもや関係者の割合は36.3%で、B地区の23.6%と比較して多いにもかかわらず、学校に対して「愛着を感じる方」(「やや感じる」および「感じる」の合計)と回答したものは、A地区では56.5%でありB地区の68.8%より少ない傾向にある。

学校に対する評判(表8-3)は、両地区の間に有意の差はみられないが、A地区と比較してB地区の方が、学校の評判はよいと見ている傾向にある。

表一8 両地区の学校との関係(単位%)

1. 小学校に通う子どもまたは関係者

	A地区 (N=193)	B地区 (N=225)
いる	36.3	23.6
いない	62.7	74.2
D . K	1.0	2.2

$\chi^2 = 8.08 \quad df = 1 \quad P < .01$

2. 小学校への愛着度

	A地区 (N=193)	B地区 (N=225)
感じる	35.8	44.4
やや感じる	20.7	24.4
なんともいえない	25.4	14.7
感じない方	18.1	16.0
D . K	0.0	0.5

$\chi^2 = 8.93 \quad df = 3 \quad P < .05$

## 3. 小学校の評判

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
とてもよい	4.0	6.7
よい方	33.3	41.8
どちらともいえない	52.8	44.0
わるい方	4.7	5.8
D . K	5.2	1.7

$$\chi^2 = 4.86 \quad df = 3$$

その他の項目に関しては、主婦の不健康度（自覚症状数）（表10）において有意の差がみられるが、神経質（表9）、健康感（主婦）（表11-1）、健康感（夫）（表11-2）、および、生活満足度（表12）においては、両地区の間に有意の差はみられない。

表-9 神経質（単位%）

	0~3	4~6	7~9	10~12	13以上	D . K
A 地区 (N = 193)	16.5	22.2	20.2	21.8	14.0	5.2
B 地区 (N = 225)	12.0	21.8	26.7	20.4	12.8	6.3

$$\chi^2 = 3.55 \quad df = 4$$

表-10 不健康度（自覚症状数）（単位%）

	0~3	4~6	7~9	10~12	13以上	D . K
A 地区 (N = 193)	43.5	19.2	13.5	10.3	7.3	6.2
B 地区 (N = 225)	46.7	18.7	14.7	6.2	2.2	11.1

$$\chi^2 = 8.01 \quad df = 4 \quad P < .10$$

表-11 健康感（単位%）

## 1. 主婦

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
健康	67.3	64.9
まあ健康	22.2	24.4
少し具合悪い	8.3	8.3
かなり具合悪い	2.2	1.8

$$\chi^2 = 3.73 \quad df = 3$$

## 2. 夫

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
健康	63.7	67.6
まあ健康	23.3	17.8
少し具合悪い	5.7	4.9
かなり具合悪い	1.1	0.9
D . K	6.2	8.8

$$\chi^2 = 1.87 \quad df = 3$$

表-12 生活満足度（単位%）

	A 地区 (N = 193)	B 地区 (N = 225)
非常に満足	15.0	9.8
まあ満足	61.1	66.2
なんともいえない	12.4	10.7
やや不満	7.8	10.2
非常に不満	3.0	2.7
D . K	0.7	0.4

$$\chi^2 = 3.73 \quad df = 4$$



表一13 近隣騒音に対する意見 (単位%)

	A 地区 (N = 193)				B 地区 (N = 225)				$\chi^2$	df	P
	賛成	どちらとも いえない	反対	D.K	賛成	どちらとも いえない	反対	D.K			
1) ピアノの練習は子供の情操教育上大切であるから、隣近所は大目に見てあげるべきだ。	43.5	44.0	11.9	0.6	59.1	32.0	8.4	0.5	10.12	2	<.01
2) ピアノの音に迷惑する人がある以上、練習はやめるべきだ。	14.5	55.9	28.5	1.1	17.8	48.9	32.9	0.4	2.32	2	
3) 隣近所の迷惑にならない時間帯を選んで、その時間に練習すればよい	92.2	6.2	1.6	0.0	89.8	7.1	3.0	0.1	1.24	2	
4) クーラーを設置する時には自分の家の都合だけでなく、隣近所の迷惑にならない場所にとりつけなければならない。	84.9	13.9	0.0	1.2	88.9	9.8	1.0	0.3	3.47	2	
5) クーラーを設置する時には、やはり便利な場所にとりつけるべきだ。	35.2	41.9	21.8	1.1	47.1	28.9	23.6	0.4	8.76	2	<.05
6) クーラーを選択する時は、騒音の低さより性能と値段が大切だ。	19.2	45.6	34.7	0.5	23.6	37.3	38.2	0.9	3.00	2	
7) ステレオの音は大きくしないと迫力がないから、聞く時は大きな音にするのがよい。	5.7	25.9	67.9	0.5	6.7	16.9	76.0	0.4	5.12	2	
8) 騒音から逃げるができるのなら、少々費用がかかっても、自分の部屋は防音構造にしたい。	37.8	39.4	22.8	0.0	40.0	36.0	22.7	1.3	0.42	2	
9) 近所から人の声やピアノの音が聞こえてきても、お互いさまだから別に気にすることはない。	70.5	25.9	3.0	0.6	76.0	15.1	8.0	0.9	10.78	2	<.01
10) 集合住宅(団地・マンションなど)で、排水音や階上の床音が聞こえても、これは生活に伴って生じる止むを得ない音だから仕方がない。	62.7	29.0	6.2	2.1	60.4	28.4	10.7	0.5	2.46	2	
11) 自分の出す音で、時には近所に迷惑をかけることがあるかもしれないが、お互いさまだからがまんしてもらう。	49.7	35.8	13.9	0.6	54.7	28.0	16.4	0.9	2.86	2	
12) 自分の親しい家から聞こえてくる音は別に気にならない。	34.2	40.4	24.9	0.5	45.3	25.3	27.1	2.3	10.67	2	<.01
13) 自分の出す音で、特に近所に迷惑はかけていないと思う。	59.6	26.9	13.5	0.0	60.0	19.6	19.6	0.8	4.76	2	
14) 自分の出す音で、近所に迷惑をかけないよう、日ごろ出来るだけ気を配っている。	86.0	13.5	0.0	0.5	86.2	8.9	4.0	0.9	9.70	2	
15) 親しくない家から聞こえてくる音は、何となくうるさく聞こえる。	22.3	34.7	43.0	0.0	26.2	30.7	42.2	0.9	1.19	2	
16) 近隣音が問題になるのは、隣近所と日ごろ疎遠であるためである。	35.8	34.7	29.5	0.0	40.4	26.7	32.4	0.5	3.09	2	

以上、両地区の特性をまとめると、学校騒音が問題になっているA地区はそうでないB地区に比較して、世帯主および主婦とも年齢がやや低く、学歴が高く、核家族がやや多く、集合住宅に住むものが多く、居住年数は短く、地域への参加度、小学校に対する愛着度は低く、近所づきあいを好まずそして、心身の自覚症状が多い。しかしながら、周辺環境は良好と感じているものが多い。これらの結果から、両地区の間には、地区の生活構造および学校との関係のあり方等で、大きなちがいがあるといえる。そして、このことは、学校騒音が地域で問題化することとかなり関連性があると思われる。

## 2. 地区の騒音に対する反応と姿勢

### 1. 近隣騒音に対する一般の反応

表13は、両地区の近隣騒音に関する16の意見項目(難波ら1978で用いている項目を採用)に対する賛否の反応を示したものである。「ピアノの練習は子どもの情操教育上大切であるから、隣近所は大目に見てあげるべきだ」、「クーラーを設置するときには、やはり便利な場所にとりつけるべきだ」、「近所から人の声やピアノの音が聞こえても、お互いさまだから別に気にすることはない」、および、「自分の親しい家から聞こえてくる音は別に気にならない」といった意見項目において、両地区の反応の間に有意な差が見られる。一般的に、A地区はB地区と比較して、近隣騒音に対して厳しい意見をもっているといえる。

また、にぎやかさの好嫌(表14)においても、A地区は、静かな方を好む傾向にある。

表16は、両地区の近隣騒音一般に対する反応を示して

いる。まず、近隣から聞こえてくる音が最もうるさく感じる時間帯(表16-1)では、両地区とも、深夜・早朝(午後11時から午前7時)と答える割合が一番多いが、A地区はB地区と比較して、深夜・早朝にうるさく感じる割合(37.8%)が多く、また、B地区は、夜間(23.1%)が多い。

何をしているときうるさく感じるか(表16-2)、また、家のどこに居るときうるさく感じるか(表16-3)では、A地区は、「目が覚めたとき」(17.1%対1.8%)「寝室に居るとき」(43.5%対36.4%)と答える割合が高い。

表-14 にぎやかさの好嫌(単位%)

	好き	嫌い	D. K
A 地区 (N = 193)	43.5	54.2	2.3
B 地区 (N = 225)	49.2	42.2	8.6
$\chi^2 = 3.51 \quad df = 1 \quad P < .10$			

表-15 自宅のにぎやかさ(単位%)

	にぎやかな方	静かな方	D. K
A 地区 (N = 193)	59.6	38.9	1.5
B 地区 (N = 225)	54.2	43.6	2.2
$\chi^2 = 1.08 \quad df = 1$			

表-16 両地区の近隣騒音一般に対する反応(単位%)

### 1. 邪魔と感じる時間

	昼間 7am~4pm	夕方 4pm~7pm	夜間 7pm~11pm	深夜・早朝 11pm~7am	一日中	その他	D. K
A 地区 (N = 193)	17.1	9.3	15.5	37.8	1.6	7.8	10.9
B 地区 (N = 225)	20.9	6.7	23.1	27.6	1.7	13.3	6.7

$$\chi^2 = 10.99 \quad df = 5 \quad P < .10$$

### 2. 何をしている時

	眠ろうとして いるとき	目が覚め たとき	休憩をして いるとき	家事をして いるとき	家族との団 らんするとき	その他	D. K
A 地区 (N = 193)	27.9	17.1	10.9	8.8	3.0	15.4	16.9
B 地区 (N = 225)	33.8	1.8	10.2	8.9	8.0	27.8	9.5

$$\chi^2 = 39.99 \quad df = 5 \quad P < .001$$

3. 家のどこに居るとき

	寝室	居間	台所	食堂	その他	D.K
A 地区 (N = 193)	43.5	31.1	5.0	1.6	3.8	15.0
B 地区 (N = 225)	36.4	33.8	5.3	0.8	15.3	8.4

$$\chi^2 = 22.37 \quad df = 4 \quad P < .001$$

2. 両地区の近隣から聞こえる音に対する反応

表17および表18は、両地区の近隣から聞こえてくる音を、邪魔率（聞こえてきた各音について、「非常に邪魔」「邪魔」、「やや邪魔」、「どちらともいえない」、「親しみを感じる方」の5段階で評定してもらい、各音の発生総数のうち、「非常に邪魔」又は「やや邪魔」と評定された音の占める割合）の高い音の順にならべたものである。両地区とも、邪魔率の上位には、マージャン、自動車、クーラーといった物理的にみて比較的大きな音が占めているのがわかる。

地区別にみると、A地区ではB地区と比較して、ステレオ（A地区55.6%、B地区32.7%）、ラジオ（A地区40%、B地区22.3%）、楽器（A地区24.4%、B地区16.6%）階段を歩く音（A地区45.2%、B地区23.4%）、換気扇（A地区50.0%、B地区7.1%）、水道（A地区34.5%、B地区17.3%）、ドアの開閉音（A地区29.5%、B地区20.0%）、台所の調理音（A地区11.2%、B地区0.0%）などの邪魔率が高く、また、B地区は、A地区と比較して、床を歩く音（A地区24.1%、B地区41.7%）、仕事場から出る音（A地区36.4%、B地区52.8%）、トイレの音（A地区18.8%、B地区33.4%）などの邪魔率が高い。このような傾向は、A地区には集合住宅が多いこと、また、B地区には木造住宅が多く（表4-2、3）、周辺環境が込み合っていること（表7-3）を反映していると思われる。

話し声に関しては、A地区の邪魔率は、48.7%、親しみを感じる率は、5.3%、一方、B地区の邪魔率は、19.3%、親しみを感じる率は、17.3%というように両地区の間で大きな差が見られる。このことは、近所づきあいの特徴、（表5）および地域参加の特徴（表6）で示された両地区の人間関係の特徴を反映していると考えられる。

また、学校から出る音に関しては、A地区の邪魔率は25.1%、親しみを感じる率は14.0%、一方、B地区の邪魔率は19.6%、親しみを感じる率は17.4%で、A地区の邪魔率はB地区よりも高く、また、親しみと感じる率はB地区よりも低い。本調査は、実際に、学校騒音に対して苦情の多い地区（A地区）とそうでない地区（B地区）

とを調査対象地区に選んだが、この調査結果においても、両地区の間に差が見られる。両地区の住民と学校との関係（表8）のちがいが、学校騒音の問題に関連するものと考えられる。

3. 両地区の自宅から漏れて外に発生している音に対する反応

表19は、自宅から外に漏れて発生しているのではないかと思うかを26音それぞれに聞いた結果、各音ごとに漏れていると答えた割合（発生率）を両地区別に示したものである。発生率において両地区の間に有意な差の見出された音は、「話し声」（A地区58.5%、B地区71.1%）「階段を歩く音」（A地区33.7%）、「台所の調理音」（A地区45.1%、B地区65.3%）、「トイレの排水音」（A地区55.4%、B地区66.7%）、「水道の音」（A地区47.2%、B地区60.0%）、「掃除機の音」（A地区51.8%、B地区72.0%）、「換気扇の音」（A地区43.0%、B地区56.0%）、「フトンタタキの音」（A地区35.8%、B地区52.9%）、および、「仕事場から出る音」（A地区7.3%、B地区16.9%）である。これらの音のすべてが、B地区において多く発生している。

また、両地区の発生総数で比較してみると、A地区36.69%、B地区43.30%で、B地区の発生率はA地区と比較して有意（ $\chi^2 = 49.09$ ,  $df = 1$ ,  $P < .001$ ）に高い。

表-17 A地区の邪魔な音(単位%)

音の種類	発生音数 (N = 1356)	邪魔感の程度		
		邪魔な方	どちらとも いえない	親しみを 感じる方
1 マーじゃん	11	63.6	36.4	0.0
2 ステレオ	45	55.6	42.2	2.2
3 自動車	131	51.2	41.2	3.1
4 クーラー	58	50.0	44.8	0.0
5 換気扇	8	50.0	50.0	0.0
6 話し声	76	48.7	43.4	5.3
7 階段を歩く音	31	45.2	51.6	0.0
8 ちり紙交換	110	41.8	50.9	2.7
9 テレビ・ラジオ	35	40.0	51.4	8.6
10 仕事場の音	11	36.4	45.5	9.1
11 水道	29	34.5	65.5	0.0
12 動物	62	33.9	37.1	21.0
13 ドアの開閉音	71	29.5	64.8	4.2
14 日曜大工	21	28.5	61.9	4.8
15 入浴	23	26.0	69.6	4.3
16 学校	107	25.1	57.0	14.0
17 楽器	86	24.4	54.7	18.6
18 床を歩く音	29	24.1	69.0	0.0
19 子供	104	23.0	55.8	15.4
20 風鈴	18	22.3	33.3	38.9
21 トイレ	48	18.8	79.2	0.0
22 洗濯機	39	15.4	82.1	2.6
23 鳥	49	12.2	44.9	40.8
24 掃除機	26	11.5	69.2	19.2
25 台所の調理音	18	11.2	83.3	0.0
26 フトンタタキ	60	10.0	78.3	10.0
27 虫	36	2.8	36.1	50.0
芝刈機	6	0.0	100.0	0.0
集中冷暖房機	5	100.0	0.0	0.0
カラオケ	3	33.3	66.7	0.0

(D. Kは除く)

表一18 B地区の邪魔な音（単位％）

音の種類	発生音数 (N = 1382)	邪魔感の程度		
		邪魔な方	どちらとも いえない	親しみを 感じる方
1 マー ジャン	21	57.1	23.8	9.5
2 仕事場の音	55	52.8	43.6	0.0
3 クーラー	51	47.1	52.9	0.0
4 自動車	101	46.5	47.5	1.0
5 床を歩く音	12	41.7	58.3	0.0
6 ちり紙交換	100	38.0	51.0	3.0
7 風鈴	24	37.6	33.3	25.0
8 トイレ	48	33.4	62.5	2.1
9 ステレオ	55	32.7	52.7	12.7
10 動物	55	30.9	56.4	7.3
11 入浴	21	28.6	52.4	14.3
12 日曜大工	11	27.3	72.7	0.0
13 子供	118	25.4	62.7	8.5
14 洗濯機	49	24.5	73.5	0.0
15 階段を歩く音	47	23.4	68.1	2.1
16 テレビ・ラジオ	54	22.3	63.0	13.0
17 ドアの開閉音	55	20.0	70.9	3.6
18 学校	92	19.6	60.9	17.4
19 話し声	98	19.3	58.2	17.3
20 水道	23	17.3	78.3	4.3
21 フトンたたき	95	16.9	69.5	11.6
22 楽器	66	16.6	56.1	19.7
23 鳥	19	15.8	52.6	26.3
24 掃除機	40	12.5	75.0	10.0
25 換気扇	14	7.1	92.9	0.0
26 台所の調理音	32	0.0	71.9	21.9
27 虫	20	0.0	30.0	50.0
芝刈機	1	0.0	100.0	0.0
集中冷暖房機	3	33.3	66.7	0.0
カラオケ	2	50.0	50.0	0.0

(D. Kは除く)

表-19 両地区の自宅から外に漏れていると感じている音

音の種類	A地区 (N=193)		B地区 (N=225)		$\chi^2$	df	P
	発生数	発生率(%)	発生数	発生率(%)			
1 テレビ・ラジオ	140	72.5	179	79.6	2.83	1	
2 ステレオ	91	47.2	110	48.9	0.13	1	
3 話し声	113	58.5	160	71.1	7.24	1	<.01
4 楽器	69	35.8	74	32.9	0.38	1	
5 子供	55	28.5	83	36.9	3.31	1	
6 床を歩く音	72	37.3	99	44.0	1.93	1	
7 階段を歩く音	65	33.7	105	46.7	7.26	1	<.01
8 ドアの開閉音	111	57.5	131	58.2	0.02	1	
9 台所の調理音	87	45.1	147	65.3	17.30	1	<.001
10 トイレ	107	55.4	150	66.7	5.52	1	<.05
11 入浴	94	48.7	130	57.8	3.44	1	
12 水道	91	47.2	135	60.0	6.91	1	<.01
13 洗濯機	121	62.7	156	69.3	1.85	1	
14 掃除機	100	51.8	162	72.0	18.10	1	<.001
15 クーラー	101	52.3	134	59.6	2.20	1	
16 集中冷暖房機	25	13.0	31	13.8	0.06	1	
17 換気扇	83	43.0	126	56.0	7.02	1	<.01
18 自家用車	66	34.2	62	27.6	2.16	1	
19 日曜大工	36	18.7	48	21.3	0.46	1	
20 動物(ネコ,犬など)	35	18.1	41	18.2	0.01	1	
21 鳥	32	16.6	37	16.4	0.00	1	
22 風鈴	31	16.1	36	16.0	2.98	1	
23 マーチャン	16	8.3	19	8.4	0.00	1	
24 フトンタタキ	69	35.8	119	52.9	12.33	1	<.001
25 芝刈機	16	8.3	17	7.6	0.08	1	
26 仕事場の音	14	7.3	38	16.9	8.85	1	<.01

表20は、自宅の外に漏れていると感じている音(表19)に関して、「気になる程度」と「具体的配慮の有無」に従って、両地区ごとに合計したものであるが、それぞれにおいて、両地区の間には有意な差がみられる。すなわち、A地区はB地区と比較して、自宅から外に漏れていると感じている音に対して「気にする率」が高く、同時に、「具体的に配慮する率」も高い。

以上のことから、A地区は、自宅から外に漏れていると感じている音の率は低いにもかかわらず、「気にする率」および「具体的配慮率」が高い傾向にあり、一方、B地区は、自宅から発生する音の率が高いにもかかわらず、「気にする率」および「具体的配慮率」は低い傾向にあ

ることがわかる。両地区の間に見られるこのような相違は、両地区住民の生活構造のちがい(Ⅲ結果と考察1)が大きく関係しているものと考えられる。

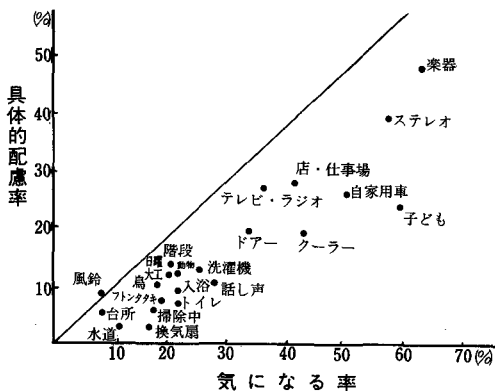
図1は、自宅からは外に漏れていると感じている各音について、「具体的配慮率」と「気になる率」との関係を示したものである。全体的に、「気になる率」に比較して「具体的配慮率」は低い傾向が見られる。とくに、「子どもの声」、「自家用車」、「クーラー」といった音ではその傾向が目立ち、気になっても具体的配慮をしない傾向にある。一方、「楽器」「ステレオ」などの音では比較的具体的配慮をする傾向にあり、音の種類によって両者の関係にちがいが見られた。

表一20 両地区の家の外に漏れていると感じている音についての気になる程度と具体的配慮の有無(単位%)

	気になる程度			具体的配慮	
	かなり	少し	全く気にしない	ある	なし
A地区 (N = 1841)	8.0	25.5	66.5	18.4	81.6
B地区 (N = 2533)	4.8	16.7	78.5	10.6	89.4

$\chi^2 = 79.56 \quad df = 2 \quad P < .001$

$\chi^2 = 53.44 \quad df = 1 \quad P < .001$



図一1 自分の家から外に漏れていると感じている音についての気になる率と具体的配慮率

### 3. 近隣騒音を出す側と聞く側との関係

図2は、生活音を出している側の「気になる率」と聞いている側の「邪魔と感じている率」との関係を示したものである。これをみると、音によってかなり、「気になる率」と「邪魔率」との関係にちがいがみられる。「子どもの声」および「楽器の演奏音」は、出している側が「気にしている率」が最も高い音であるが、それに比較して、聞く側が「邪魔と感じる率」は低い。すなわち、これらの音は、一般的にみて、出している側が気にするほどには聞く側は邪魔と感じていないということである。一方、「集中冷暖房機」および「マージャンの音」は、聞いている側の「邪魔率」が最も高い音であるが、それに比較して、出している側の「気にしている率」は低い。すなわち、これらの音は、一般的にみて、聞く側が邪魔と感じているにもかかわらず、出す側はそれほど気にしていないということである。その他、「邪魔率」は低い、「風鈴」、「水道」といった音においても、「邪魔感」と「気になる程度」との間に同じような関係がみられる。

このように、各音ごとに「邪魔感」と「気になる程度」との関係のみてみると、生活音を出す側の音に対する態

度と聞く側の音に対する反応との間には大きくない違いがあることが分かる。

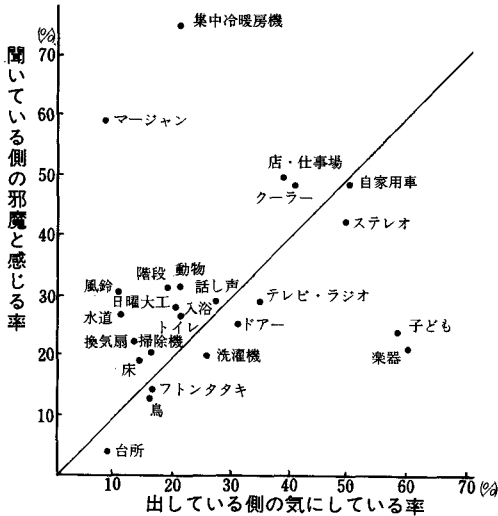


図-2 生活音を邪魔と感じている率と出している側の気にしている率

「Ⅱ研究方法と手続き」で述べたように、この調査では、1つの学校を中心とした、一定地区内の隣接し合う住宅を調査した。したがって、Aという家で騒がしいと感じているBの家の音に対して、Bの家ではどのような気づかいをしているのかというような、ある1つの音に対して、聞く側と出す側の両方からの資料を得ることが可能となった。「Ⅲ結果と考察2」で示された「非常に邪魔」「邪魔」および「やや邪魔」という苦情のついた音のうち、その音源となっている家の側の態度についても資料が得

表-21 近隣から騒がしいと指摘された家とその音数

	騒音が出ていると指摘された家	発生騒音
A 地区	34	66
B 地区	50	79
計	84 (軒)	145 (件)

られた音 (N = 145) は、表21に示すとおりである。これらの聞く側と音源側とが対応している145の音に関して、上述された聞く側の反応と出す側の態度との関係が、さらに分析された。

表22は、騒音を聞いている側の「邪魔感の程度」と出している側の「気になる程度」との関係を示している。

まず、邪魔な音として指摘された145音のうち、34.5%の音は、音源側が発生している、または、外に漏れていると思っていない。そして、外に漏れていても全く気にならないとする音は、24.8%で、少しでも気にしている音は、聞く側が邪魔と思う音のおよそ40%に過ぎないことが分かる。

また、邪魔の程度によってみると、「非常に邪魔」な音のうち、59.1%が音源側によって発生しているまたは、外に漏れていると思われておらず、「かなり気にしている」のは、9.1%に過ぎない。「邪魔」と「やや邪魔」な音に関しては、発生していると思っていない割合は、それぞれ29.0%、30.4%で、およそ70%が発生している、または、外に漏れていることに気がついており、「非常に邪魔」な音と比較して、「気にしている率」が逆に高いのが分かる。

表23は、騒音を聞いている側が、出している側から感じるその音に対する「配慮の有無」と、その騒音を出している側の実際の「具体的配慮の有無」との関係を示している。

まず、邪魔な音として指摘された145音のうち、実際に騒音を出す側から何らかの配慮がなされている音は、43.4%で、結果的に配慮がなされていない音（「配慮しない」および「発生していると思っていない」音）は、56.6%というように、配慮されていない音の割合の方が高いことが分かる。

騒音を聞く側が、「配慮されている」と感じる音に関してみると、実際に配慮されているのは、45.8%で、54.2%の音は配慮されていない。

また、「配慮なし」と感じる音に関しては、44.4%の音が実際に騒音を出す側から何らかの具体的配慮がなされており、55.6%の音は配慮されていない。すなわち、聞く側が「配慮されている」と思っている音の40%近くが実際に何の配慮もされておらず、また、「配慮なし」と思っている音でも45%近くが、出す側によって何らかの配慮をしている音であることが分かる。このように、騒音を聞く側の相手に対して感じる配慮感と出す側の実際の配慮の有無との間には、かなりのくい違いが存在しており、このくい違いが近隣騒音の問題を大きくしていく1つの要因とも考えられる。



表一22 騒音を聞く側の邪魔感と出している側の気になる程度（単位％）

騒音を聞いている側	騒音を出している側				N
	かなり気になる	少し気になる	全く気にならない	発生していると思っていない	
非常に邪魔	9.1	13.6	18.2	59.1	22
邪魔	19.4	16.1	35.5	29.0	31
やや邪魔	17.4	29.4	22.8	30.4	92
N	24 (16.6)	35 (24.1)	36 (24.8)	50 (34.5)	145

$$\chi^2 = 10.67 \quad df = 6 \quad P < .10$$

表一23 騒音を聞く側と出している側の配慮の関係（単位％）

（配慮を感じる有無——実際の配慮の有無）

騒音を聞いている側	騒音を出している側			N
	配慮している	配慮しない	発生していると思っていない	
配慮されていると感じる	45.8	16.7	37.5	72
配慮なしと感じる	44.4	30.2	25.4	63
D. K	20.0	10.0	70.0	10
N	63 (43.4)	32 (22.1)	50 (34.5)	145

$$\chi^2 = 4.82 \quad df = 2 \quad P < .10$$

#### 4. 邪魔感と音源との関係

表24は、近隣から聞こえてくる音のうち、その音源となっている家または人がはっきりしている1505音（D.Kは除く）をもとにして、聞く側の邪魔感の程度と、音源となっている家または人を知っている程度（「顔も見ることがない」「ちらっと見かける程度」「挨拶をする」「立ち話をする」そして「それ以上のつきあい」の5段階評定）との関係を示したものである。この表から、「顔も見ることがない」から「それ以上のつきあい」へと音源を知っている程度が増加するにつれて、邪魔感を感じる率（「非常に邪魔」「邪魔」と「やや邪魔」な音の発生率の合計）が減少する傾向が分かる。「顔も見ることがない」という音源から聞こえてくる音の58.8%が邪魔感を感じる音であり、親しみを感じる音は、7.0%にすぎない。一方、「それ以上のつきあい」をしている音源から聞こえてくる音の26.9%が邪魔感を感じる音で、親しみを感じる音は、17.2%というように、かなりのちがいがみられる。

表25は、同様に1523音（D.Kは除く）をもとにして、聞く側の邪魔感の程度と、音源となっている家または人

に対する「好感度」（「全く好感をもっていない」「あまり好感をもっていない」「どちらともいえない」「やや好感をもっている」および「好感をもっている」の5段階評定）との関係を示したものである。この表から、好感度が増加するにつれて、邪魔感を感じる率が減少する傾向が分かる。「全く好感をもっていない」音源から聞こえる音の59.8%が「邪魔感」を感じる音であり、「好感をもっている」音源から聞こえる音では、「邪魔音」は20.5%に減少し、また、親しみを感じる音は、6.3%から21.2%に増加しているように、音源に対する好感度のちがいが、邪魔感の程度に大きく関係している。

表26は、邪魔感を感じる838音（D.Kは除く）をもとに、邪魔感の程度とその邪魔音の対処の仕方（「気にしないようにする」「がまんする」および「その他の対処行動」（直接文句を言う、他人に注意してもらう、投書するなど）との関係を示したものである。邪魔感の程度が大きくなるにしたがって、「気にしないようにする」から「その他の行動」といった具体的な対処をしていることがわかる。

表27は、同様に、775（D.Kは除く）の邪魔音をもと

に、邪魔感の程度と相手からの配慮感の有無との関係を示されたものであるが、両者の間には有意な関係は見い出

表一24 邪魔感と知っている程度との関係（単位％）

音源を知っている程度	邪魔感の程度					N = 1505
	非常に邪魔	邪魔	やや邪魔	どちらとも いえない	親しみを 感じる方	
顔も見たことがない	12.0	11.4	35.4	34.2	7.0	158
ちらっと見かける程度	15.5	10.5	19.9	51.4	2.8	181
挨拶をする	8.4	7.4	19.4	58.3	6.5	571
立ち話をする	3.2	6.6	13.9	63.3	13.0	409
それ以上のつきあい	7.0	4.8	15.1	55.9	17.2	186

$$\chi^2 = 116.28 \quad df = 16 \quad P < .001 \quad (D, K \text{は除く})$$

表一25 邪魔感と好感度との関係（単位％）

音源に対する好感度	邪魔感の程度					N = 1523
	非常に邪魔	邪魔	やや邪魔	どちらとも いえない	親しみを 感じる方	
全く好感をもっていない	27.6	10.2	22.0	33.9	6.3	127
あまり好感をもっていない	22.6	18.5	25.8	33.1	0.0	124
どちらともいえない	7.0	7.8	19.4	59.9	5.9	681
やや好感をもっている	6.1	7.5	17.9	60.2	8.2	279
好感をもっている	3.2	2.6	14.7	58.3	21.2	312

$$\chi^2 = 224.94 \quad df = 16 \quad P < .001 \quad (D, K \text{は除く})$$

表一26 邪魔感と対処の仕方との関係（単位％）

対処の仕方	邪魔感の程度			N = 838
	非常に邪魔	邪魔	やや邪魔	
気にしないようにする	5.9	20.8	73.3	307
がまんする	38.8	25.8	46.4	449
その他の行動	40.2	25.6	34.2	82

$$\chi^2 = 113.46 \quad df = 4 \quad P < .001$$

表一27 邪魔感と相手からの配慮感との関係（単位％）

相手からの配慮感	邪魔感の程度			N = 775
	非常に邪魔	邪魔	やや邪魔	
ない	23.1	22.2	54.7	696
ある	29.1	25.3	45.6	79

$$\chi^2 = 2.50 \quad df = 2$$

表28は、近隣から聞こえてくる音の中から、学校から出ている192音(D.Kは除く)をもとにして、聞く側の感じている学校に対する愛着度と邪魔感の程度との関係を示したものである。「愛着を感じている方」の19.7%が邪魔な音として、また、22.2%が親しみのある音として学校から出る音を聞いている。また、「愛着を感じない方」の45.4%が邪魔な音として、また、6.1%が親しみのある音として聞いている。すなわち、学校に対する愛着の度合が増大するほど親しみを感ずる音として聞こえる率が増大し、逆に邪魔な音として聞こえる率は低下する傾向にあることが分かる。

表29は、学校から出ている127音(D.Kは除く)をもとにして、これらの音の出ている「学校に通う子どもや関係者の有無」と邪魔感の程度との関係を示したものである。「関係者のいる方」が「いない方」と比較して、邪魔な音(37.1%対15.7%)と感じやすい傾向にあること

が分かる。「Ⅲ結果と考察1」で示された、学校騒音の問題の多いA地区とそうでないB地区との間で見られた傾向と同様に、「関係者の有無」に関しては、仮説とは逆の傾向がみられる。

表30は、同様に、186音(D.Kは除く)をもとに、「学校に対する評判の受けとめ方」と「邪魔感の程度」との関係を示したものである。評判に関して「どちらともいえない」が最も邪魔と感じる率が高く、また、「親しみを感ずる」率が低い。両者の関係はあまり明確ではない。

以上、音源と聞く側との関係のちがいが、邪魔感にどのように表われているかをみてきたが、全体として、音源を知っている程度や音源に対する好感度などの心理・社会的関係といった要因が、邪魔感に強く影響しているといえることができるであろう。

表一28 学校から出る音に対する邪魔感と学校に対する愛着度との関係(単位%)

愛着度	邪魔感の程度			N = 192
	邪魔な方	どちらともいえない	親しみを感ずる	
愛着を感じる方	19.7	58.1	22.2	117
どちらともいえない	14.3	78.6	7.1	42
愛着を感じない方	45.4	48.5	6.1	33

$\chi^2 = 12.14 \quad df = 4 \quad P < .05 \quad (D.Kは除く)$

表一29 学校から出る音に対する邪魔感と学校関係者の有無との関係(単位%)

関係者の有無	邪魔感の程度			N = 189
	邪魔な方	どちらともいえない	親しみを感ずる方	
いない	15.7	63.0	21.3	127
いる	37.1	56.5	6.4	62

$\chi^2 = 14.21 \quad df = 2 \quad P < .01 \quad (D.Kは除く)$

表一30 学校から出る音に対する邪魔感と学校の評判の受けとめ方との関係(単位%)

評判	邪魔感の程度			N = 186
	邪魔な方	どちらともいえない	親しみを感ずる方	
よい方	11.4	65.8	22.8	79
どちらともいえない	35.5	53.8	10.7	93
わるい方	7.7	76.9	15.4	13

$\chi^2 = 17.58 \quad df = 4 \quad P < .01 \quad (D.Kは除く)$

## 5. 騒音に悩んだことのある群と悩んだことのない群

ここでは、全対象者を、これまでに騒音に悩んだことのある群(N=207)とない群(N=207)の2群に分けて分析を行なっている。

表31は、表19で示されている26種類の音に関して、自分の家から外に漏れていると感じている音の総数、そのうちの「気になる音」、および、「配慮のある音」の総数を示している。発生率に関しては、悩まされたことのある群とない群の間には、有意な差はみられない。しかし、自分の家から出ている音のうち、「気になる音の率」および「なんらかの配慮をしている音の率」に関しては悩ん

だことのある群では、29.9%と16.4%、悩んだことのない群では、22.7%と11.3%というように、両群の間には有意な差がみられる。すなわち、悩まされたことのある群は悩まされたことのない群と比較して、自宅から外に出ている音を気につけ、また、それらの音に対してなんらかの配慮をする傾向が強い、ということである。

表31は、外から聞こえてくる音のうち、邪魔音に対する対処の仕方を示したものであるが、悩んだことのある群と悩んだことのない群との間に有意な差がみられる。すなわち、悩んだことのある群では、邪魔音に対して、「がまんする」(54.2%)傾向が強く、また、悩んだことのない群では「気にしないようにする」(52.7%)傾向が強い、といえる。

表一31 両群の自分の家から外に漏れていると感じている音の気になる率と配慮率

	発生音数 (発生率)	気になる音数 (率)	配慮のある音数 (率)
悩まされたことのある群 (N=207)	2208 (41.0)	661 (29.9)	362 (16.4)
悩まされたことのない群 (N=207)	2120 (39.4)	482 (22.7)	240 (11.3)

$\chi^2 = 2.72 \quad df = 1$        $\chi^2 = 28.86 \quad df = 1 \quad P < .001$        $\chi^2 = 23.25 \quad df = 1 \quad P < .001$

表一32 両群の邪魔音の対抗の仕方 (単位%)

	がまんする	気にしないようにする	その他の行動	N = 1052
悩まされたことのある群	54.2	37.0	8.8	697
悩まされたことのない群	38.0	52.7	3.3	355

$$\chi^2 = 26.14 \quad df = 2 \quad P < .001$$

また、表31が示すように、両群の間には、邪魔感の程度においても有意な差がみられる。悩んだことのある群の「邪魔率」(「非常に邪魔」「邪魔」および「やや邪魔」の合計)は42.5%であり、悩んだことのない群の20.1%と比較してかなり高いことがわかる。

以上述べられてきた結果をまとめると、近隣騒音に悩んだことのある群は、外から聞こえてくる音をかなり邪魔だと思っ

自分の家から発生する音には気をつかい、なんらかの具体的配慮をすることが多い傾向にある。それに対して、悩んだことのない群は、外から聞こえてくる邪魔音を気にしない傾向にあり、また、自分の家から発生する音に対しても、気にしたり、配慮したりすることが少ない傾向にある、ということである。このように、両群の間は、生活音に対してかなり異なる反応、姿勢がみられる。

表一三 悩まされたことのある群 (N = 207) と悩まされたことのない群 (N = 207) における聞こえてくる音に対する邪魔感の程度 (単位%)

	非常に邪魔	邪魔	やや邪魔	どちらとも いえない	親しみを 感じる方	D.K	N = 2913
悩まされたことのある群	12.8	9.6	20.1	43.5	9.2	4.8	1495
悩まされたことのない群	3.6	4.4	12.1	64.2	9.2	6.5	1418

$$\chi^2 = 193.23 \quad df = 4 \quad P < .001$$

なお、その他、両群の間で有意な差のあった項目は、特性では、「世帯主の学歴」、「住居構造」、「住居形式」、「周辺環境の印象評価（外の景色）」、「にぎやかさの好嫌」、「家の中の静かさ」および「不健康度（自覚症状数）」などがあり、騒音に悩まされたことのある群はない群と比較して、世帯主の学歴が高く、木造・一戸建独立住宅に住む人が多く、外の景は悪いと感じ、静かなことと好み、そして、健康度が低い傾向にあることが見い出されている。

#### IV まとめと提言

以上、本研究で見い出された結果と考察を述べてきたが、地域の生活音が近隣騒音となっていく過程には、聞く側の音源との心理社会的関係、音を出す側の配慮や気づかいと聞く側のその受けとり方との間に生じるくい違い、音に対して全く異なる反応、姿勢をもつ2つのタイプの人間がいること、そして、地域の生活構造のあり方のちがいが関係していることが示された。近隣騒音の問題を考える場合、音の物理量に加え、これらの人間側の条件からも考えていかなければならないことが強く示唆される。

最後に本研究の結果から示唆される近隣騒音対策を山本（1982）でもふれているが、ここでもいくつか述べておきたい。

1) 生活音そのものは生活を営む上で自然に発生する音であり生きている明かしである。それ故、生活音を抑制することなく、しかも隣人に邪魔感をあたえないためにはまず住居の建築構造を改善することである。しかし密集した地域や集合住宅では完全な物理的遮へいは費用の点で高くつく。

2) 本研究では騒音となる生活音を出している音源の人又は家について聞く側がどの程度知っているか、又は、好きか嫌いかという程度が聞く側の邪魔感を大きく左右することが分かった。学校騒音もその小学校に対する愛着度が関係していた。この事実は近隣騒音が近隣関係の希薄化とコミュニティの崩壊と関係があること示している。コミュニティそのものを改善して行くことは困難な

課題である。本研究の結果が示しているように、顔を見たこともない音源の場合、邪魔感を感じる生活音は58.8%であるのに対し、挨拶をする関係にある音源の生活音は35.2%に減少する。このことから近隣の関係において少なくとも会ったら挨拶する程度 of 関係を保つだけで近隣騒音問題はかなり減ることが予想される。

3) 音を出している側と聞いている側のずれが大きいたことが近隣騒音の特色であることがこの研究で示された。このことは、日頃日常生活において自分のところで発生する音については配慮が行きとどかない人々が多いことを示す。またこの程度くらいはとと思っていても聞く側に立つ人によっては騒音として受けとる場合もある。この点、日常生活で自分の発生する音について管理する態度をもつ習慣を身につける必要がある。これは子どもの頃から身につけるべき家庭教育の問題である。

4) とはいっても、他人の生活音に対して敏感で悩む人と、悩まない人という個人差が存在している。悩む人は一般に静かな生活を好むし、悩まない人はにぎやかな生活を好む。このことはライフスタイルの相違とも考えられる。この異なる2つのタイプが隣り上下同志平和共存するための知恵も必要である。しかし集合住宅の場合深刻な問題にまで発展することがある。とするなら、集合住宅の入居時に絶対に静かに暮したい人と適当ならよいという人とを住み分けられるように配慮する工夫も必要だと考えられる。

本研究は近隣騒音問題に悩む人々に少しでもなんらかの解決の糸口が提示できればと考えたことが研究の出発点であった。騒音研究者からだけでなく、近隣騒音問題にとりくむ方々からの意見や批判、さらに問題提起を期待している。

#### 文 献 一 覧

加藤正明（代表）

1976 都市生活における精神健康度に関する総合研究（昭和47年・48年・49年度特別研究）科学技術庁研究調整局

- 小林 晋・石原邦雄・坂本 弘  
1974 地域環境と住民の健康度(1) 精神衛生研究  
(国立精神衛生研究所紀要) 24号 pp.1 - 48
- 守田 栄  
1974 『騒音と騒音防止』 オーム社
- 難波精一郎  
1978 近隣騒音の測定法と評価 騒音制御 2巻  
No 3 pp.3 - 10
- 難波精一郎  
1979 騒音の影響の心理社会的評価について 心理  
学評論 22巻 No 2 pp.182 - 199
- 難波精一郎・桑野園子・中村敏枝・加藤 徹  
1978 近隣騒音に関するアンケート調査 日本音響  
学会誌 34巻 10号 pp.592 - 599
- 林 道義・佐野芳子(編)  
1974 『近隣騒音』 日報
- 山本和郎  
1973 地域精神衛生からとらえた環境: その影響  
に関する研究の問題点 心理学評論 16巻  
pp. 277 - 297
- 山本和郎  
1982 近隣騒音の心理社会的構造 公衆衛生  
46巻 7号 pp. 470 - 474
- 山本和郎・山内宏太郎・久田 満  
1982 生活音と地域社会: 近隣騒音の心理社会的  
構造 昭和56年度 東京都衛生局公害保健課  
委託研究報告書
- Farr, L. E.  
1967 "Medical consequences of environmental home noises"  
The Journal of the American Medical Association 202:171 - 174.
- Ittelson, W.H., Proshansky, H.M., Rivlin, L.G. and Winkel, G.H.  
1974 An Introduction to Environmental Psychology. New York:  
Holt, Rinehart and Winston (望月衛他訳 環境心理の基礎, 環境心理の応用 東京: 彰国社, 1977)
- Jones, D.M., Chapman, A.J. and Auburn, T.C.  
1981 "Noise in the environment: A social perspective"  
Journal of Environmental Psychology 1: 43 - 59.
- Moos, R. H.  
1976 The Human Context: Environmental Determinants of  
Behavior. New York: John Wiley & Sons (望月衛訳 環境の人間性 東京: 朝倉書店, 1979)
- Schultz, T.J.  
1978 "Synthesis of social survey on noise annoyance"  
Journal of Acoustical Society of America 64: 377 - 405.

## A STUDY OF PSYCHOSOCIAL FACTORS AFFECTING COMMUNITY NOISE ANNOYANCE

Koutaro Yamanouchi\*, Mitsuru Hisata\*\* and Kazuo Yamamoto\*\*

\* Sophia Junior College

\*\* Keio University

*Comprehensive Urban Studies*, No. 18, 1983, pp. 65-87

The purpose of this study was to clarify the relationship between noise annoyance and social psychological factors in community relations (mostly between neighbors).

A questionnaire-type survey on community noise was given to 602 housewives living in two separate residential areas in Meguro-ku, Tokyo. In one residential area surveyed, school noise pollution was considered a problem, while in the other it was not.

The results gathered from a total of 418 valid questionnaires showed that there were differences in 1) the structure of community life between the two residential areas; and 2) the response to community noise as well as attitude toward noise emitting from one's own household. In regards to community spirit it was found that the degree of emotional attachment to one's school was inversely related to noise annoyance, that the degree of closeness felt with the neighbors making the noise was inversely related to the degree of noise annoyance and that degree of friendly feelings toward neighbors making noise was inversely related to noise annoyance. The survey also showed that the degree of noise annoyance felt was in direct relation to the coping pattern used. It was also discovered in the survey that there was no consistent pattern between the person making the noise and the person perceiving it. There were marked differences both in reaction to and attitude toward noise between the noise-annoyed group and the not-noise-annoyed group, and so on.